
最後の戦いが終わったとき

三月 亜莉棲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の戦いが終わったとき

【Nコード】

N3748X

【作者名】

三月 亜莉棲

【あらすじ】

これはハリーポッターのその後です。ハリーの子供の名前がわからないので作りました。オリキャラあります♪ハリーの子供、ジェームズはホグワーツの1年生。恋あり青春ありのどたばたコメディ
1。

登場人物（前書き）

ハリーの子供など名前がわからないので
作っちゃいました（笑）
よろしくお願いします

登場人物

ジェームズ・ポッター

寮・・・グリフィンドール

杖・・・不死鳥の尾羽 30 cm

性格・・・ハリーに似て好奇心旺盛。

ジュリアのことが好きでクイディッチは

ハリー並みのうまさがある。

ジュリア・ウィーズリー

寮・・・グリフィンドール

杖・・・ドラゴンの心臓の琴線 26 cm

性格・・・あっさりした性格。

ハーマイオニーに似て髪は金髪。

勉強が大好きでジェームズが好き。

ルーズ・マルフォイ

寮・・・グリフィンドール

杖・・・ユニコーンの尾の毛 25 cm

性格・・・マルフォイと少し似ているが、

とってもやさしい。ジェームズとは

だいの仲良し。

アリア・グリフィンドール

寮・・・グリフィンドール

杖・・・ユニコーンの尾の毛 30 cm

性格・・・学校の創設者、グリフィンドールの子孫。

スーザンとは幼馴染。

スーザン・ハッフルパフ

寮・・・ハッフルパフ

杖・・・ユニコーンの鬣の毛 25 cm

性格・・・学校の創設者、ハッフルパフの子孫

アリアの幼馴染でルーズが気になる。

バック・スリザリン

寮・・・スリザリン

杖・・・不死鳥の尾羽 25 cm

性格・・・学校の創設者、スリザリンの子孫。

明るいがナルシスト。でも面白いため、みんなと仲が
いい。

アンディ・レイブンクロー

寮・・・レイブンクロー

杖・・・ユニコーンの鬘の毛 20 ?

性格・・・学校の創設者、レイブンクローの子孫。

明るいがとてもマイペース。かっこいい。

フローラ・グレンチェン

寮・・・グリフィンドール

杖・・・ユニコーンの尾の毛 30 cm

性格・・・ナルシスト自分が何でも一番だと思っている。

ジェームズの事が好きで、ジュリアを見下している。

マルク・ショートニングス

寮・・・スリザリン

杖・・・不死鳥の尾羽 25 cm

性格・・・頭がいい、ジュリアが好きでいつもアプローチしてい
る。

親が金持ちなため、権力で何でもしてしまう。

レイラ・コーラル

寮・・・レイブンクロー

杖・・・ドラゴンの心臓の琴線 32 ?

性格・・・明るくてなんでも頑張るやさしい女の子。

セイラと仲が良く勉強の成績は学年で1、2を争う。

セイラ・ローズ

寮・・・レイブンクロー

杖・・・ユニコーンとマールアの髪の毛 21？

性格・・・温厚な性格。静かだが、魔法の

威力は計り知れないほど。

レイアンが怒ってもセイラは軽々よけてしまう。

マリア・スーティー

寮・・・レイブンクロー

杖・・・ユニコーンの鬘の毛 20？

性格・・・チョウの娘。

明るくて、皆に慕われている。

成績がよくマグルと魔法のハーフ。

レイアン・ブラッキー

寮・・・スリザリン

杖・・・サンザシにユニコーンの毛 34？

性格・・・短期ですぐに怒る。

怒らせると相手はレイアンに蛇をだされ

殺されかける。

登場人物（後書き）

なんかおおくなっちゃいましたね。
これからよろしくお願いします。

ホグワーツからの手紙（前書き）

がんばるぞう！！

感想等お願いします♪

ホグワーツからの手紙

・・・ダダダダダダダダダダダダダダダダ！！

「父さん父さん！！」

「どうした、ジェームズ。そんなにあわてて」

「手紙が・・・ホグワーツから手紙が届いたよ！！」

「ああ！もうそんな時期か！」

「どうしたの？ あら、ホグワーツの手紙じゃない！」

「あけていい？」

「ああ」

カサッ

ジェームズ・ポッター殿

あなたは今年の9月からホグワーツで

魔法を習う事、学習する事を正式に許可します

「やったーーーー！！！！これで父さんと母さんのいったホグワーツに行けるよ！」

「よかったな。じゃあ明日、ダイアゴン横丁に行っているものを買いに行くか。」

「やったーーーー！！」

ポスッ

「あら？手紙が来た見たいね。」

「ジェームズ、あなたによ。ジュリアから。」

「ほんと!!」

ジェームズへ

聞いて!!

あたしにホグワーツから手紙がきたの!

お母さんとお父さんの行ったホグワーツにいけるのよ!!

ジェームズは手紙は来た?

お返事頂戴ね♪

ジュリアより

「父さん!ジュリアもホグワーツに行く事が決まったみたいだ!

」

「そうか、じゃあハーマイオニーとロンに言って一緒に買い物に行くか?」

「うんっ!!」

「つてことは久しぶりにロンに会えるのねえ久しぶりだなあ。」

「ロンは忙しいからな、俺は仕事場一緒だから毎日会うけど。」

「ジェームズ、じゃあ今日中に今行ってる学校に転校手続きしとかなないとね。」

一緒に来る?」

「うんっ!!」

「じゃあ俺はハーマイオニーたちに会いに行ってくるよ。ジェームズにも手紙が来た事を」

言っとかないとな。」

そして母ジニーはジエームズと学校へ。

父ハリーはハーマイオニーとロンに会いに家をとにした。

ホグワーツからの手紙（後書き）

うまくかけましたかね？

感想等お願いします♪

ちなみにハリーとロンは闇払いになったという設定です。

買い物 くダイアゴン横丁 (前書き)

買い物スタートです♪

ハーマイオニーのいところ作っちゃいました、
(アイリーン・グレン
ジャー)

買い物（ダイアゴン横丁）

「ジュリア！久しぶり。手紙ありがとう♪」

「ジェームズ、お互いおんなじ学校でよかったね♪」

このときこの二人は確実に結ばれるだろうとハーマイオニー、ロン、ハリーは

思った。

「じゃあまずは杖を買いに行こう、オリバンダーまでいこう。」

「じゃあ先に行つて？グリンゴッツに行つてこの子達のお金を取つてこなくっちゃ。」

「まだとつてきてなかったのか？」

「ロン。しょうがないじゃない、昨日までいとこのアイリーンが来てたんだから。」

「じゃあしょうがないな。じゃあ行こうか。」

そしてハーマイオニーは姿現しを使って、グリンゴッツへ、

ロンとハリー、ジュリアとジェームズはオリバンダーにむかった。

カランツ

「オリバンダーさんいますか？」

ガラーーツ ドン

「おやつ？ ハリーとロンじゃないか！ それにそこにいるのは子供だね？」

「ええ僕たちのお互いの子供です。」

「ほおー！ じゃあココに来たのはその子たちの・・・」

「ホグワーツの入学が決まったんです。」

「おお！ そうか！！ じゃあ杖を選んであげよう。これはどうかな？」

オリバンダーはジェームズにユニコーンの毛 25 cm を、
ジュリアに不死鳥の尾羽 30 cm をだしてくれた。

「ふってみなさい」

ジェームズとジュリアは杖をふった。

バリーーンツ バシーーンツ

「はて？ ちがったかぁ・・・じゃあ・・・」

そしてジェームズとジュリアはそれから3本ほど（！）杖を変えてためし

ジェームズは不死鳥の尾羽 30 cm、ジュリアはドラゴンの心臓の琴線 26 cm に決まった。

カランツ

「遅れてごめんなさい。ハリー、ロン。ジェームズとジュリアの

杖は決まった？」

「ああ。決まったよ。」

「そう。じゃあほかにいるものを買に行きましょう。」

そして一向はいるものの数々の品をかい、ジュリアにはめんふくろうジェームズもめんふくろうで

ジュリアは「ポリア」となづけジェームズは「クース」となづけ
た。

ホグワーツ　く入学く（前書き）

やっと入学です（汗）

遅かったですね・・・でも

たぶん早かったほうだと思います（えっ！

ホグワーツ　　入学

「みなさん初めまして。校長のマクゴナガルです。これから
組み分けをします。私についてきてくだ
さい。」

僕はマクゴナガル先生のことを父さんから聞いてたんだ。

それにジュリアの母さんもココの教師だからいろんな先生の話
を聞いたりしたんだ。

「それではこれから組み分けを始めます。」

組み分けが始まった。ジュリアも僕もそしてルーズもグリフィン
ドールにはいりたい。

「アリア・グリフィンドル」

グリフィンドル？なんで寮と同じ名前なんだ？

「グリフィンドル！！」

アリアはグリフィンドルに入った。あとでできたが彼女は学
校の創設者、グリフィンドルの
子孫らしい。

「アンディ・レイブンクロー」

今度はレイブンクロー!？

「レイブンクロー!!」

こちら後も後で聞いたがレイブンクローの子孫らしい。

「スーザン・ハッフルパフ」

今度はハッフルパフ!？

「ハッフルパフ!!」

こちら後も子孫である。

「フローラ・グレンチェン」

今度は普通だ・・・よかった・・・

「グリフィンドール!!」

彼女はグリフィンドールか・・・なんだかめんどくさそう・・・

「マルク・ショートニングス」

かわった名前だなあ・・・

「スリザリン!!」

スリザリンか・・・なんかあいつずっとジュリアのことみてないか？

「ルーズ・マルフォイ」
ルーズの番だ!!

「うーん。まようのお・・・じゃあ・・・グリフィンドール!!」

「やったー!!」

ルーズはグリフィンドールだ!!」

組み分け(2) (前書き)

第2です (笑)

組み分け（2）

「ジェームズ・ポッター」

僕の番だ！

「グリフィンドール！！」

ほんとになれた・・・あの・・・グリフィンドールに！！

「ジュリア・ウィーズリー」

ジュリアだ！

「グリフィンドール！」

「やったわ！」

ジュリアもグリフィンドールだ！

「バック・スリザリン」

今度はもう驚かないぞ。

「スリザリン！」

やっぱり・・・

そのあと、すべての生徒の組み分けが終わり、宴も終わったあと、監督生につれられてそれぞれの寮に帰っていった。

「ジュリア！ルーズ！」

「ジェームズ！同じ寮になれてよかったわね！お母さんに手紙書かなきゃ！」

「俺も！お父様に書かなきゃいけないな。お父さん的にはスリザリンも良かったかもしれないけど」

「あらあら・・・なにをお話しているの？」

「えっと・・・キミは・・・」

「フローラ・グレンチェンよ！」

「そうか。フローラ。別に何の話でもいいだろう？僕たちの話だ。」

「ふんっ別にいいけど・・・それとジュリア・ウィーズリー。」

「なに？あと、そのジュリア・ウィーズリーっていいかたやめてくれない？」

「そんなのどうでもいいわ。それよりあなたはあまりジェームズの近くに寄らないことね。」

そういつて、フローラはいつてしまった。

「なんなんだ？ジュリアきにするなよ？俺らはいつでも一緒なんだから！」

「ありがとう。ルーズ。気にしないことにするわ。」

「あなたたち、フローラ・グレンチェンを甘く見ないほうがいいと思うわよ？」

そういったのは、アリアだった。

「どういことだ？教えてくれないか？」

「いいわ・・・」

そしてアリアは語り始めた。

組み分け(2) (後書き)

うまくかけたかな？

フローラは・・・(前書き)

アリアの語りですね☆

フローラは・・・

フローラはアリアとマグルのとき同じ学校だった。

そのとき、フローラはお金持ちなことをいいことにターゲットを決めてはいじめていた。

「やめて！やめて！お願いだから・・・」

そしてあるときアリアは我慢できず思わず魔法を使ってしまったのだ。

しかし・・・フローラはそれを・

「そんなていど？」っと

受け止めてこういった。

「あたしはそんなの聞かないわ？あたしに勝てるだけでも？」

アタシ自身、危害は加えてはならないと弱めにしてしまったためこうなってしまった。

そのとき、いじめられていた女の子はもういじめられなくなったがいまだに内心びくびく

しているとこの前手紙があったという。

その数週間後、フローラに手紙が届いたという。

（アリアは子孫の為、ホグワーツに入る事は決まっていて手紙は

こない。)

「怖い。」

「でしょ？」

「だから気をつけたほうがいいよ。」

「ありがとう！アリア。」

「ううん。同じ寮の大切な友達なもの！」

そして、ルーズとジェームズとジュリアとアリアはこれからほとんどのときを一緒に過ごすようになった。

フローラは・・・(後書き)

短いですね(汗)がんばって投稿していきます！

あれから数ヶ月の冬 ―クイディッチ― (前書き)

うまくかけてますかね？

感想等お願いします♪

あれから数ヶ月の冬 ―クイディッチ―

今日はクイディッチの試合の日。

対戦相手はスリザリンなんだ！

「今日どっちが勝つかしら？グリフィンドール、後1勝でリーグ優勝だもんね♪」

「アリア。それ勝つてわかってるでしょ。」

「あっやっぱわかる？」

「まっそうだよねえ。だってルーズとジェームズいるし。」

じつはリーグが始まった頃、ジェームズとルーズはマクゴナガル先生にスカウトされ、

ハリーの時同様一年生でクイディッチの試合に出れるようになり試合でいつも点数を1点は

いれる、ビーターと（ルーズ）シーカー（ジェームズ）になったのだ。

そのとき、スリザリンのクイディッチチームが横を通ったとき

ローズは耳元で何かささやかれた。

「僕が勝ったら、パーティーのダンスのお相手よろしく。」

「へっ？」

ささやいたのは、前からローズにちょっかいを出していたマルクだった。

「ローズ・・・」

パーティーというのは、2週間後にあるダンスパーティーだ。パーティーの相手は男性の方から声をかけ、女性はそれをイエスカノーで答える。

「どうしよう。まさか・・・」

「朝、ジェームズに言われた事に関係あるの？」

「うん・・・多分・・・」

朝、ローズはジェームズの異変にきずいていた。それで・・・

「ジェームズ？どうしたの？」

と聞いたら、

「あのさ・・・今日、クイディッチでグリフィンドールのチームが勝ったら

ダンスパーティーに一緒に行ってくれないかな？」

といわれてしまったのだ。

そして今、試合の真っ最中にいたる。

あれから数ヶ月の冬 ―クイディッチ― (後書き)

うひょー！

ちなみにダンスパーティーは
炎のゴブレットをモデルにしました。

ダンスパーティーのお相手は？（前書き）

ちなみにアリアのダンスパートナーはアンディ・レイブンクローですよ☆

そしてなんとルーズはスーザン・ハッフルパフとダンスパートナーになりました！

その他のパートナー表

バック・スリザリン ↓ レイラ・コーラル（同じ学年）
フローラ・グレンチェン ↓ レイダス・ハーピー（上級生）

とまあこんな感じです（汗）

マルクはお金をつかってジェームズと勝負するため
シーカーになりました。

ダンスパーティーのお相手は？

「「「「がんばれがんばれグリフィンドール！！（繰り返し）」」」」

「さあおっとグリフィンドールシーカー『ジェームズ』がスニッチを発見！」

おっとスリザリンシーカー『マルク』もスニッチをおつています！どっちが

勝利をてにするのか！？おーっと『レイラ』がゴール！！グリフィンドール10点！」

（あたし、どっちにかってほしいのかな？・・・）

「おーっと！マルクスニッチをとるか！？」

（えっ！お願い！！とらないで！）

「おーっと！ジェームズスニッチを取ったー！！試合終了！勝利グリフィンドール！！」

（勝った・・・そうだ・・・あたし・・・ジェームズがすきなんだ・・・）

「ジェームズやったな！」

「ああ！ルーズ！お前も今回50点いれたんだろ！！」
「きつかったけどがんばったぜ！！」

「ジェームズ、来てくれる？」

「あっうん！ルーズちよつとまってる？」

「わかったじゃあ談話室で会おうぜ！」

「ああ！！」

「ローズ、どうしたんだい？」

「あのね・・・その・・・ダンスパートナーの話お受けします。／

「それほんと！？うれしいよ♪でもほんとに僕でいいの？」

「じつわね・・・あたし・・・ジェームズがすきな・・・」

今回のクイディッチでわかったの・・・」

「・・・じつは・・・僕もローズが好きなんだ。」

「ほんと？」

「ああ」

そして二人の影が重なったのは言うまでもない。

そしてその頃のルーズは・・・

「スーザン、いまいいか？」

「なに？」

ダンスパーティーのお相手は？（後書き）

うまくかけてたらいいなおもいます♪
感想等お待ちしております！

ルーズはスーザンが好き？（前書き）

サブタイ変でごめんなさいってか

ひどいサブタイでごめんなさい（涙）

スーザン視点とルーズ視点がありますです（あたし〓スーザン
〓ルーズ）
俺

ルーズはスーザンが好き？

「それでなに？ルーズ。」

あたしはこのときなんで呼び出されたんだろうと不安を覚えていたところだった。

「あのな・・・その・・・」

あたしはみんなからみると明るくてほんわかしてる（自分でも思う）

ハッフルパフにあってるねってよくいわれるだから『はやくいくなさいよ！』

とか『早くしてくんない？』『忙しんだけど』とかはいわないで静かに聴くタイプなんだ。

「なーに？」

うお！なんだよ・・・そんな顔でみんなよ・・・俺、その上目使いに弱いんだからよお・・・

「だから・・・その・・・スーザン、お前の事好きだったんだ。」

「えっ？」

うそっ？！ルーズがあたしを・・・

「あたしも・・・あたしもルーズが好き！！」

まじか・・・俺、パーティーまっでなくてもよかったんだ・・・

そしてこちらも二人の影が重なった事は言うまでもない。

「おーい。お前ら何処言っただんだあ（笑）」

「」「別に何処でもいいだろ！（でしょ!）」」「」

『きれいにはもってる・・・そう思わない？アンディ。』

『俺も思う。お似合いだな。特に・・・』

『『ジェームズとローズ』』

こうしてジェームズとローズ、ルーズとスーザンがからかわれた
という事は

いうまでもない話だろう・・・

ルーズはスーザンが好き？（後書き）

第三者視点もはいましたね・・・
ご了承ください・・・

ダンスパーティー　く迎えに行った先には絶世の美女たちく（前書き）

ダンスパーティーでは

創設者の子孫&そのパートナーとハーマイオニーとロンの子供&ハ
リーの息子ジェームズのダンスから始まるという設定です。

ダンスパーティー　（迎えに行った先には絶世の美女たち）

とうとうダンスパーティーの日が来た。僕は

かっこいいドレスローブに身を包み、ルーズと一緒に（スーザンの迎えもかねて）

ルーズを迎えに行った。

「どう・・・かな・・・？／＼／＼」

そこにいたのは絶世なる美女だった。

ハーマイオニーの受け売りだろう、とても白い肌に
ピンクのグラデーシヨンドレスがバラのように良く似合う。

「とっても似合ってるよ？自身もっていいんだよ♪」

「ありがとう／＼／＼」

その頃のルーズは・・・

「ルーズ、あたしへんじじゃない？」

「へんじじゃないよ、とってもきれいだ。」

／＼／

スーザンは淡いパープルのドレスに身を包み
ちよっとの化粧と照れてるせいか、頬が赤いのが良く似合う。

「じゃあ行こうか？」

「うん／＼／」

ダンスは得意でもエスコートにはあまりなれてないジェームズとルーズ。

しかしそれはポーカーフェイスで隠すが隣の絶世の美女に自分是不釣り合いじゃないかと不安になっている男子たち・・・

そして、女子は女子で隣の美男な彼氏に不釣り合いではないかと不安で仕方ないのである。

しかしその周りを通る生徒&先生は横を通るたび『美男美女ってこのことね』っと心の中でつぶやいていた。

ダンスパーティー　　く迎えに行った先には絶世の美女たちく（後書き）

あはは・・・

うまくかけてるといいけど・・・

ダンスパーティーーフロラは悲しい舞踏会ー(前書き)

ダンスパーティーー始まります。

ダンスパーティーー ―フローラは悲しい舞踏会―

僕たちはダンスパーティーの会場についた。

なぜか前からマクゴナガル校長があわててこちらに向かっている。

「あああなたたち、代表の人は集まっていますよ？

さあさ、こちらにおいでなさい。ジュリア、スーザンドレス
とっても似合っていますよ^^」

「ありがとうございます／＼／」

「それでは、代表のみなさんのご登場です！」

ファンファーレが鳴り響き僕（僕たち）は入場した。

コンコンッ

♪*****♪*****♪*****

ゆったりとした音楽が流れ、僕たちは鮮やか（ジュリア特にきれ
いだ）な衣裳に身を包み
ダンスを踊り始める。

みんな魅了されている。なぜだろう。みなさん（読者）もお分か
りのように

美男美少女たちが代表としてダンスホールで鮮やかにダンスを踊っているからだろう。

次々と先生や生徒たちがダンスに入ってゆくがあるところ（一角）で

イヤーな顔をしながら「相手を間違えた」といわんばかりの沈黙をつかさどっている。

そう、フローラである。

フローラはジェームズにダンスの申し込みをしようと思ったのだが、

ジェームズに「キミにはもったいい人がいるよ」といわれさがしていた。（あきらめた）

そして相手のレイダス・ハーピーは特上の美男だが、特上のナルシストでも

あった。人の話を聞かないためダンスも自分まかせ（ハーピーまかせ）。

きれいになったフローラの心がズタズタにされてしまった。

「あのおフローラあれだったら俺とおどるか？」

「えっ？ あっスノーダー！」

フローラに声をかけたのはフローラの授業の時隣のスノーダー・アレインだった。

「ほんとに！？ ……じゃあねレイダス。」

「えっ！ ちょっと！ なんで！？」

「あんたにはうんざりよ。スノーダー。ありがとう行きましよう？」

「ああ。じゃあ、レイダス。」

フローラは楽しそうにダンスの中に入っていた。

スノーダーはダンスが得意でフローラにやさしくエスコートしてくれる。

フローラはあまりスノーダーと話さなかったのだがたまに話すと楽しい友達であり

ジェームズのあとに好きになった人である。

「ちょっとでないか？」

「うん。」

スノーダーはバラの咲いているテラスにつれてきてくれた。

「じつは・・・前から君の事好きだったんだ。」

「えっ！？／＼／＼・・・ありがとう。わたしも好きよ。」

「ありがとう。」

二人の影が重なったことはいうまでもない。

ダンスパーティー――フローラは悲しい舞踏会――（後書き）

長くなりました

感想等願います♪

それと、今頃気付いたんですが（11月1日）
ジュリアのことをローズと間違えました（汗）
読者の皆様、お騒がせしました（涙）

アリアのダンスパーティーの夜（前書き）

うまくかけてたらしいな☆
感想等よろしくお願いします！

ルーズの母名^{ルーサ}前作っちゃいました（笑）

アリアのダンスパーティーの夜

スローダンスに変わった時、

美男美女カップルが戻ってきた（ジェームズ&ジュリア、アリア
&アンディ、スーザン&ルーズ、フローラ&スノーダー バック&
レイラ）

とてもお似合いだ。

こんなカップル何処にもいない。

「「「「「お相手お願いできますか？お嬢さん？」」「」「」」

「「「「「（ニコッ）喜んで♪」「」「」」

先生たちはこの5組のカップルを暖かく見守っていた。

みんなダンスがうまくて、美人（綺麗）で美男で。^{イケメン}

みんなの憧れの的だ。

そのとき、またファンファーレが鳴り響いた。

そう、ハリー&ジニー、ロン&ハーマイオニーそして、マルフォ

イトルーズの母が
やってきたのだ。

「（お）母さん！（お）父さん！」

「父上！母上！」

マクゴナガル校長はにっこりして、

「さあさ！みんなそろったのですからダンスを続けましょう！！」

楽しい舞踏会は遅くまであったのだった。

そしてこのダンスパーティーで結ばれたカップルが多かったのは言う事でもないだろう。

アリアのダンスパーティーの夜（後書き）

どうだったでしょうか？

いつでもリクエストまってまーす☆

次の日の僕たち（前書き）

ジェームズの両親&ジュリアの両親&ルーズの両親は
ホグワーツにとまりました。（ハーマイオニーは教師なのでもとも
と・・・ロンはたまに、ホグワーツで闇払いについて教えています
（特別教師）。

次の日の僕たち

「フアーンWWねむいなあ・・・」

「おはようジェームズ眠そうね。まああたしもねむいけどフア
Wン・・・」

「おはよう・・・ねむいな・・・」

「ほんとね・・・」

「「「「「「「「「「フアーン」」」」」」」」」」

「おはよう。みんな眠そうね。」

「その分、夜遊びをいっつもしてないんだろ。俺らいっつも抜け出
してなかったか？」

「「「そうかも・・・」」」

「ロンたちはよくてもアタシはいつてませんから。」

「わるかったな。」

「おはよう、みんな。ロンえらく元気だな。」

「そりやどうもへへってかマルフォイ、美人の奥さんは？」

「妻なら昨日、パーティーの後ピアノの引きすぎで疲れ果てて寝
てるよ。」

（父さんたち話進んでるけど、父さんたちって夜遊びしてたの！？）

「とりあえずいこう？ 僕お腹減った。」

「「「私も」」」

「「「俺も」」」

「じゃあ行こうか。」

大広間

「ジェームズ、ルーズ。今日ってクイディッチの試合じゃない？」

「そうだっけ！？」

「んっほんとだ！ ジェームズ早く食べていかねえと高学年組みに・

・

「やっやばい・・・いそげっ！」

「ハガガハガガ・・・」

「そういうこと思い出すと早いよね・・・」

「じゃあいってきます！」

「おいっ！ ちょっとまで！ スーザン、じゃあいってくるから。」

「いってらっしゃい。レイブンクローとの試合がんばってね♪」

次の日の僕たち（後書き）

感想等お待ちしておりますーす♪
リクエストもお願いしまーす☆ミ

今日この頃・・・(前書き)

なんか変なサブタイ・・・
ご了承を・・・

華逗葉

今日この頃・・・

試合が終わり、（勝利！）僕たち（ジェームズ）は再び大広間に戻り、今日は大活躍だったあの、あの時はひどかったあのジェームズは親もクイディッチをやっていたためなんだかんたらずっと話をしていた。

「そういえば今日ってウィーズリーの新作チョコのお披露目会じゃない？」

「ああそういえばフレッドとジョージが変なチョコ作ってた。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「たしか・・・かえるの卵チョコ。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「変だろ？おれもやめとけっていったんだけど・・・」

そのとき、

「「はーいみなさん新作チョコのお披露目だよお！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そんなこんなで、ジェームズたちは新作チョコのお披露目にとことん付き合わされたとき。

[illegible]

今日この頃・・・（後書き）

かわいそうですね・・・（汗）

ごめんなさい。

次回もよろしくお願いします。

やっぱりキミがいないと・・・(ジェームズ)(前書き)

短ッ!!

ご了承を・・・

やっぱりキミがいないと・・・(ジェームズ)

今日は、大変な1日だった。でもとっても楽しかった。

だってジュリアとずっと一緒にいられたから。

「なあジェームズ。お前今日ずっとジュリアみてたな。」

「なっ！／＼／」

「大丈夫。だって俺だってずっとスーザンを見ていたいよ。でも

気付かれると恥ずかしいからな」

「だよな・・・やっぱり・・・」

「俺たちってあいついないとだめだな。。。」「」

綺麗にはもり、大爆笑する2人だった。

「お前らそんな感じでいると誰かに採られるぞ？」

「父さん！」

「俺も一時期採られたからな。気をつけろ」

「なんてのんきなんだ・・・」

「頑張るんだな。俺の場合大丈夫だかな。」

「このやろ～～～～！」

こうして2人の馬鹿笑いがはじまったのであった。

やっぱりキミがいないと・・・ (ルーズ) (前書き)

なんか詩っぽいですが・・・

感想等お待ちしてまあす☆ミ

やっぱりキミがいないと……
(ルーズ)

今日はスーズンとホグズミードでショットピングをしていた。

冬だからあたりは一面雪化粧をしていて、ホグズミードはクリスマス一色だ。

「きれいなね♪雪が真っ白だわ。ステキな☆ルーズ！」

「ああ。スーザンって雪がすきなんだ？」

「うんっ！だって真っ白で心が安らぐ気がしない？」

コレだからスーザンってやさしいんだ。

俺が、スーザンを好きになったのも無理はないと思う。

「ほお。確かに……だからスーズンも心が綺麗なんじゃない？」

「ありがとう……うれしい……」

シーズンが照れてる！かわいいiiiiiiiiiii！！

「いや……それにスーズンって雪が似合うよ。」

「そう？」

「ああ。肌が白くて綺麗だし、タイプからしても似合うと思う。」

「ありがとう！」

「じゃあそろそろいこっか。」

「うんっ！」

俺たちは歩いた。スーザンと手が当たって・・・彼女は迷ったみたいだけど、

俺から手を繋いだら彼女はびっくりしたみたいだった。

でも彼女はうれしそうに手を握り返してくれた。

そのとき思った。

”俺ってキミがいないとダメだな”

ってね。

やっぱりキミがいないと・・・ (ルーズ) (後書き)

うまく書けたらいいなあ☆ミ

マリアの発言（前書き）

チヨウの子供作っちゃいました。

マリアの発言

ただいま、マクゴナガル校長じきじきの変身術の授業。

いい先生になりそうな人が今はいないからマクゴナガル校長がやってるんだって（あたしはマクゴナガル先生って呼んでる）

「それではこのふくろうをアリに変えます。出来るものもいると思いますがいっしょに見とくように」

「「「「「はいっ。」」「」「」「」「」

これまたマクゴナガル先生ってすごいと思う。

アタシ的に一番すごい魔法使いは、もういないけどダンブルドア前校長。

マクゴナガル先生はその次に入るくらいだ。（ちなみに3番目はアタシの両親とハリーおじさん）

「それでは、今日はこれで終わりです。それと今週ホグズミードにご褒美としていく事になりました。各自、親にこの書類にサインをもらってくるように。」

そしてあたしたちの机の前に一人ずつ1枚の書類が置かれた。

大広間☆。＋・

「今日の変身術の授業おもしろかったあ。」

「俺たちクイディッチの朝練でなしだったんだよな。一時限目。」

「お母さんに聞いて『逆転時計』借りてこよっか？」

「それだと体力使うからクイディッチに響く。」

「そっかー。ー。」

今日もとってもおいしいホグワーツの昼食をとりながらおしゃべりしている。

そこへ。

「みんなあ今日暇？」

そこにいたのはマリア・チェン・スーティーだった（チョウの子供）。

「なんで？」

「きょうあそんでいいって先生が。」

「じゃあ遊ぼう！」

こんな感じでどんどん話が膨らんでいった。

遊ぶぜい！

「じゃあいまからパーティーはじめーーーーー！！」

そう。マリアの発言はとうとうパーティーになってしまった。
しかし、みんな楽しそうだ。

それから・・・約2時間

「あなたたち、そろそろ寝ないとレイブクローから苦情がきま

すよ!」

「マクゴナガル先生が忠告に来てパーティーは終わった。」

グリフィン・ドール（男子の部屋）

「楽しかったなあジェームズ。」

「ああ! まさかあんなに来るとは思わなかったけどな（笑）」

「確かに!」

来た人数は・・・なんと50人。

そりゃ驚くのも無理はないだろう。

「「じゃあおやすみ!」」

（女子の部屋）

「テンション高かったわねえマリア。」

「確かに☆でも楽しかったあ☆」

「じゃあみんな明日ね☆おやすみい！」

進級 | **2年生** | **(前書き)**

みんなが進級しました！

進級
— 2年生 —

今日で進級して、2年生なんだ。

「みなさん進級おめでとうございます。」

これからも友とともに学問にはげみ、楽しい毎日を過ごしましょ」

こんな感じで新入生の歓迎会も終わり、

僕たちは、グリフィンドールの談話室でたわいのない会話をしていた。

「そういや明日ってロンドンにいけるんじゃないかったっけ？」

「そういえばっ！」

今年、数ヶ月に一回ロンドンで自由に出歩く事が許されるようになったのだ。

しかし、罰則をうけるものもいる。

なぜなら、勝手に魔法を使ってしまふ頭を使わないものがあるからだ。

そのため、生徒は厳しく先生方に監視されている。

進級 — 2年生 — (後書き)

次回、ロンドンでブラブラ・・・

ロンドンでブラブラ（ルーズとスーザン）

「これ可愛い!!」

白いワンピースを身にまとった美しい少女。

彼女はある青年に笑顔を向けて話している。

「どうかかな？」

「似合うと思うぜ。あとコレ着てみたら？」

青年も他の人より数段かっこいい。

彼の手にしたのは、花柄のほんわかしたチュニック。

「どう?」

彼は、本当に彼女の魅力を引き出すのがうまい。

彼女を見たたんほかの男たちが振りかえる。

まあルーズこと青年は少女ことスーザンを見て顔を赤くしている。

まあしょうがない。だって綺麗だから。

「これからもアタシの洋服選んでね？あたしもアナタの服を選ぶから。」

二人は照れながらも仲良く、静かにロンドンでのショッピングを楽しんでいた。

ロンドンでブラブラ（ルーズとスーザン）（後書き）

ちよつとかつこつけすぎですね・・・

ごめんなさい（汗）

これからよろしく願います！

ロンドンでブラブラ（ジェームズとジュリア）

「ジェームズ！似合うじゃない。いい感じ！」

今日は待ちに待ったロンドンの外出日。

ただいま僕はジュリア（彼女）に今日着てきた洋服を褒めちぎられている。

まあジュリアは僕の好きなブランドのガールファッションの服が大好きで、

彼氏の僕と趣味が合うからとてつもなく今日の僕のファッションが気に入っている。

「ねえ・・・あたしケーキ食いたい。」

「ケーキ？いいけど何処で食べる？」

つと目の前にオシャレななんとケーキバイキングのあるカフェが
！！

「あのお店とかは？」

「いいね。じゃあいこう！」

「ここのチーズケーキおいしい！」

ジュリアはケーキのあまりのおいしさにずっと微笑んでいた。

しかしほんとに冗談なしでケーキ、うまいんだけど。

「ここの紅茶。おいしい。」

僕はとりあえずと思い飲んだ紅茶の味に驚いた。

「いい香り・・・ほんとだ！おいしい。」

こんな感じで僕たちは外出日を存分に満喫して。

「また一緒にこようね？」

「ああ。いいよ。」

クイディッチ ―彼は誰？―ジュリアの疑問

今日はクイディッチの試合。対戦相手はハッフルパフ。

スーザンとルーズは2年になってますます仲が良くなった。

だけどクイディッチは関係なくお互いチームに入っているせいか、

スーザンはブラッジャーをチームから遠ざけルーズは相手チーム
の男と

ボールの取り合い。

そしてスニッチ。

そう、今日も華麗にジェームズがとうとうと・・・

あれっ

「「「「「がんばれがんばれグリフィンドール!!」」「」」「」」

」

とうとう声に出た

「あれっ?」

「どうしたの？ジュリア。」

「ねえあの子だれ？」

「えっ？あっ！ほんと！いつもとシーカー違うし・・・」

そう、私たちが一番びっくりしたのは。

「「ジェームズについてきてる。」」

そう、ジェームズについてきてるってこと。

試合終了後。

「アリア、なんか考え事？」

「アンディ。今日の試合のハッフルパフのシーカーって誰なの？」

「それ。スーザンに聞けばいいんじゃない？」

「聞いたんだけど、知らないって。スーザンも試合で大変だったから覚えてないって。」

そう、あれからチームのメンバーに聞いてみたが知っているものはいなかった。

「そういえばジェームズについてきてたな。」

「ええ。ジュリアがきずいたのよ?」

「そういうことか・・・調べてみるよ☆」

「ほんと!ありがとうアンディ!」

ギュッ

アリアは夢中でアンディに抱きついた。そのときアンディの顔は夕焼け色に染まっていた。

クイディッチ ―彼は誰？―ジェームズの疑問

ジュリアが疑問に思っている頃ジェームズは。

（あと少し！ジュリアが応援してくれてる。ルールズも頑張ってるんだから！）

そのとき横から、

「悪いね、スニッチはいただくよ。」

そう、知らない子だった。

（させるもんか！）

バッ！

パシッ！！

とったのは・・・

「ごめんね？立てるかい？」

「ああ。くっそー取れると思ったのによー！」

そう、ジェームズだった。

そして、グリフィンドールが勝利した。

しかし、ジェームズは彼の名前を聞けなかった。

「彼は、
いったい誰なんだ？」

疑問の彼は――

その時は突然やってきたんだ。

「ハ―イ。キミ俺のこと覚えてるかな？ ジェームズ君？ ジュリアちゃん？」

「「へっ？・・・あああああああああ！！！」」

そう。クイディッチの時疑問に思った彼。しかもその制服を僕は見て驚いた。

「キミ。グリフィンドール！？」

「えっ！？ だってクイディッチの時、ハッフルパフにいたじゃない！！！」

そう、制服のアップリケはグリフィンドールだった。

疑問の彼は意地悪な笑みを持っていて。

「そうなんだ。よろしくな。俺はフィデルフィ・ネビルだ。」

[illegible]

そりやあびつくりするよ。

なぜならぜんぜんネビル先生に似てないんだもん！

ネビル先生から息子さんのフィデルフィのことは聞いてたんだ（
実際父さんにも聞いた。）

でも、全然似てない！！！！！！！！！！

「おつ、フィデル。皆一緒だな。」

そこにきたのはネビル先生。

（ネビル先生！全然似てないじゃないですか！）

（（（そうだそうだ！！）））

（しょうがないだろう？ルーナに似てるんだから。性格はどっちにも似てないけどね。）

ルーナっていうのは、ネビル先生の奥さん。

とっても綺麗なんだって（ジュリアの母さんから聞いた）

「よろしく！っていうか、俺昨日からここだからよくわかんねーんだけど。」

「そういえば転校生って魔法界ではないことじゃないの？」

「フィデルは特別だ。もともと違うところにいたんだが、いろいろ理由があつてな。」

綺麗な彼女（前書き）

フィデルフィ視点です！

綺麗な彼女

僕は、目を疑った。

「そうそう！だから～～～でねえアハハッ」

綺麗だ。今まで男子校の魔法学校にいた俺はいつも街に行く時、綺麗な女子はたくさん見るのだが、あんなに綺麗な女子は見た事がない。

俺のものにしたい。

だけど、その横には。

「ジュリア、それはさあ～～」

彼がいた。父さんと仲が良かったハリーポッターの息子、ジェームズ。

だけど、いつものとおり俺は引き下がりがたくねえ。俺はあきらめが悪いから。

「ハイ。キミ俺のこと覚えてるかな？ ジェームズ君？ ジュリアちゃん？」

クリスマスパーティーの誘い

ある日ホラス・スラグホーン先生（これからはホラス先生）に突然。

「キミたち、わしの開くクリスマスパーティーに来ないかね？」
といわれたんだ。

楽しそうだから、みんな

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

って答えだった。そしてホラス先生は、

「じゃあ24日に男女ペアを作って私の部屋に来なさい。」

だった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

どうしよう。ジュリアと行きたいけど・・・

この前、フィデルに会ってからフィデルがずっとジュリアを見て

る気がするんだ。

「ジュリア、一緒に行く？」

「そうね・・・でもまず行こうかなあ行かないどころかなあ。考えとくからもう少しまってね？ ジェームズ。」

「ああ。」

ジュリアはまずいくかどうか決めてなかった。

だからまってるんだ☆

でも少し不安なんだ。だってこの前、

「ジュリア、俺とクリスマスパーティー一緒に行かないか？」

「・・・ごめんなさい。少しまってくれる？」

っていった。

ジュリア、キミは誰を選ぶんだい？

パーティーの数日前 ―ジュリアの決断―

「そうだったわ。フィデル、悪いけどあなたとはパーティーにはいけない。」

ほんとにごめんなさい。」

「そうか・・・しょうがないよ・・・ありがとう。」

いま。ジェームズはいない。

みんないきなり皆の前でそんな話をされたため目が点になっていた。

「どうしたんだい？」

「あっジェームズ、パーティーの事だけどいいわよ☆
一緒に行きましょう？」

「もちろん！」

僕を選んでくれたんだ。

数日後。

「俺、マリアと行く事にしたんだ。」

「マリアと！へえ・・・てっきり違う人かと・・・」

「俺が言おうか迷ってたら向こうから言ってくれたんだ。うれしかったよ☆」

「へえ・・・ってことは・・・」

「そっ！あたしたち付き合う事にしたの！」

「「マリア！」」

これで、みんなめでたしめでたしのペア決めが終わったとき♪（ちなみに他のペアはそのまま）

パーティー当日

「ねえねえ。ジェームズ。フローラのドレス、可愛いね・・・」

今回、あたしは母に、ハーマイオニー

『これは私がお父さんの気持ちに気づく前に行ったパーティーのドレス。』

このドレスがあったから私はお父さんと結婚出来たようなものよ？

あなたもペアの人とずっと一緒にいられるといいわね？』

といわれ（相手がジェームズって知ってるの）思い出のドレス、バラの花びらのようなスカートのドレスを着ているの。

ジェームズはすごくキュートだって（すごくうれしい。誰だってキュートって言われたらうれしいでしょ？）

ルーズに聞いたんだけどジェームズはお父さん（ハリー）のドレスローブを着てるんだって。

そしていまあたしはフローラのドレスに魅了されてる。

だってすごくキュートなんだもん！

それにフローラに色があっていいなあ（フローラは肌が白いから白に腰のところの黒のリボンが可愛い！）

「でも・・・その・・・ジュリアもすごく可愛いよ？
だから自信もつていいんだから。ね？」

「ありがとう・・・ジェームズ！」

その頃フローラは・・・

「このドレス、やっぱり可愛い。選んでくれてありがとう。スノーダー。」

「いいや。キミは肌が白いからその色がいいと思って。」

あれからフローラはレイダスには付きまとわれておらず相変わらずスノーダーと仲が良かった。

「フローラ！そのドレス、すごくキュートね！」

向こうでジュリアがこれまた可愛いドレスを着て私のドレスをほめてくれる。

「ジュリア！アナタのドレスもステキよ！」

そして、いろいろなペアが集うなか、皆がとても楽しく
特にジェームズとジュリア、そしてフローラとスノーダーはとても
楽しいパーティーだったのであった。

マダルの見学（前書き）

マダルが学校に来ちゃいます！（話的にあたしがこのイベント作っちゃいました）

選ばれた人ですけどね？

詳しく聞きたい方はメッセージください！

マグルの見学

今日はパーティーが終わって3日後。

そして今日は、

「皆さん。今日はマグル見学です。気を引き締めて望んでください。」

そして、言わせてもらいますが少しならいたずらもかまいません。

授業中は駄目ですが。」

「「「「「イエーイー!!」「」「」「」

じつは、僕の父さんのいとこのダドリー（呼び捨てでもいいって父さんが散々痛い目合わされたから）

の一家がこの見学で来るんだよなあ・・・

僕的にはダドリーの子供、バグスとレイラ（レイラは別にいいけなさないし）はあいたくない存在。

いっつも僕と友達と父さんと母さんをけなすんだ。

「それでは、どうぞ。」

たつくさんはいつてきた。

「よお。ジェームズ。授業お手並み拝見だな！あとクイディッチだっけ？」

「ああ。そうだよ。まあみてなよ。」

「楽しそうねえ。あたしも魔女になってみたいな。」

「多分体験とかあるんじゃない？わかんないけど。」

「楽しみだわ！」

「じゃあとでなレイラ。バグスはご勝手に〜。」

最後に嫌味をいってやった！

レイラは可愛クスクスと笑っている。

バグスはイヤ〜な顔してるぞ笑えるな（笑）

こうして僕たちのめんどくさいと思っている
マグル見学が始まった。

授業 (ジェームズ&レイアン)―戦闘訓練―(前書き)

魔法の名前がわからない人はメッセージに
わからない魔法の名前を書いて私まで！

(ウィキペディアでもできます)

授業 (ジェームズ&レイアン) — 戦闘訓練 —

「それでは、そうですねえ・・・ジェームズ、前へ！」

「はい！」

「それでは、わしのほうからは、そうですねあ・・・
レイアン、前へ！」

「はい！」

今は、『闇の魔術の防衛術』の授業の真っ最中。

そして今回の授業のテーマは『戦闘訓練』。

昔、父さんとマルフォイおじさんが戦った。

その頃は仲が悪かったからお互いすごい技の出し合いだったんだ
って。

「1. 2. 3 (ワンツースリー) ！！」

「エイビス
Avis！」

「その程度か？ポッター。」

「まあ見てればわかるよ (笑) レイアン。」

「どういうことだ!」

「oppugno! いけ!」
オバグノ

「わっちょっ! ギャー! ギャー!」

レイアンは鳥に追い掛け回され・・・

ズッテーン!! ズバズバズバツ!

レイアンはぎりぎりこけた体を鳥の光線からにげた。

「こっこけた・・・」

「ゆ・・・許さないぞ! ポッター!!!」

「ぎよえ!?!」

(ねえルーズ。やばくない?)

(うっうん。あれは。やばいよな? スーザン。)

(ええ。レイアン・ブラッキーは怒らせると・・・)

「許さん! Serpensortia!」
サーペンソーテイヤ

バシユン!

シーツシーツ

(やばいわ! 蛇を出したらほんとにあぶない!)
(なぜ?)

(ルーズ!そんなに甘ったれないで!あれは毒蛇よ!)
(毒蛇!?)

「レっレイアン!よせ!蛇をなおさんか!」

「うるさい・うるさいうるさい!!!」

「ポッターあぶない! インセンディオ Incendio!

ジュース

蛇は燃えてしまった。

「大丈夫かね?ポッター君。すまんの。わしの寮の生徒が・・・」

「大丈夫です。それにマクゴナガル先生、僕も一樣魔法習ってますから

蛇を出されたときの戦闘時対処法ならいましたし、燃やせばいいのも知っています

構えていたのですが・・・」

「そうでしたか。さすがですね。勉強を生かすのは良いことです。
グリフィンドール20点!」

「「「「やったー!」」」」」

「ポッター君が無事で何よりだ。レイアン、キミは減点だ。」

スリザリン10点減点！」

「「「「そっそんなあ・・・」
（涙）」「」「」

「さて。次は誰が使用かの？」

授業 (ルーズとセイラ) — 戦闘訓練 — (2) (前書き)

戦闘訓練の続きですね☆

そして一人またキャラ増やします。

セイラ・ローズ

寮・・・レイブンクロー

杖・・・ユニコーンとマール(セイラの母)の髪の毛

性格・・・温厚な性格。静かだが、魔法の

威力は計り知れないほど。

レイアンが怒ってもセイラは軽々よけてしまう。

授業（ルーズとセイラ）――戦闘訓練――（2）

「それでは次に・・・ルーズ！前へ！」

「はい。」

「それでは今度は私の寮でいかがかな？

じゃあ・・・セイラ、キミでいいかな？」

「はい、もちろんです。フリットウィック先生。」

「初めまして、セイラ。手加減はしたほうがいいかな？」

「最初はしてくださいな^^しないほうがいいと思ったら
とことん本気で戦いましょう。」

「わかりました^^」

「それでは位置について！1. 2. 3.！」

「I m p e d i m e n t a !
インペディメンタ！」

「おわっ！」

ルーズは吹き飛ばされてしまった。

（すごい！こんな相手と戦えるなんて夢みたいだ！）

「本気を出してもよさそうだね。」

「そうかしら？」

「甘いね・・・Obscuro」

オブスクーロ

「きゃっ！」

「まだまだ行くぜ！Stupefy！」

ステューピファイ

「うっ！Finito Incantatem」

フィニート・インカンターテム

「なーんだ。つまんねー。」

「うるさいわね！Lacarnum Inflammarae！」

ラカーナム・インフラマレーイ

「おわっ！」

（なんか灼熱の戦いって感じね。）

（なんか見たところルーズと五分五分だわ。）

（確かに、そういえば、アリア、いつ入ってきたの？）

（ああ。逆丹時計で他の授業に出た後ココに来たわ。）

（アリア、なんかローズのお母さんみたい。）

（そうかもね）

『灼熱の戦い』とはいい表現な感じなんだ。

やばいよ。これ、なんかすごいことになってるよ？

でも、そろそろ終りそうだけど・・・。

どういう終わり方で終わるか全然検討がつかないんだけど・・・

それでも、結末はすぐに来たのである。

「ステューピファイ
Stupefy！」

「もう終りだ！」

「へっ!？」

「ペトリフィカス・トタルス
Petrificus Totalus！」

カシッ ゴトンッ

「そこまで! いやあ、グリフィン・ドールは強いですがなあ、
フィニート・インカンター・テム
Finito Incantatem。」

「すみません。フリットウィック先生。」

「いやいや。すばらしい戦いでしたね。」

「そうですね。フリットウィック先生。今回の戦闘訓練は終了です。」

他のものは次回の『闇の魔術と防衛術』を授業でとりなさい。」

「「「「「はい!」」」」」

こうして、

とてつもない迫力のあった戦闘訓練の第一回の幕が静かに、いや騒がしく、

閉じたのであった。

次の日の朝　―大広間マルクとセイラは仲がいい!?―（前書き）

セイラ視点です☆

寮が違うのに仲がいい（すきなのか？）二人を書きました☆

次の日の朝　―大広間マルクとセイラは仲がいい！？―

「だからねえ☆〜〜だよ？だからあ〜」

今日も楽しく大広間に友人ときました（笑）

「おはよう。セイラ。」

「あらっおはよう！マルク、今日は一人？」

「ああ、みんな試験勉強で忙しんだ。僕は朝勉強すると眠くなつて逆に成績が

落ちるから勉強はしないんだ。」

「へえ。あたしは、勉強は昼にみんなでするタイプだから。

レイブンクローは結構頭の回転がいい人が多いしあたしもその一人みたい（笑）」

「じゃあ朝はレイブンクローの人はみんな試験のある数日前でも普通におしゃべりしたり、ご飯食べてるんだ？」

「そうそう。」

「マルクー？早く来ねーとクイディッチの朝練遅れるぜー！」

「おおーまっててくれ！じゃあセイラ、また昼に会えば。」

「ええ。クイディッチ頑張つて。」

「じゃあ。」

タッタッタッタ・・・

「セイラあ。もしかしてえ・・・」

「わっちょ・・・レイラ！もう、いきなりなによ・・・」

「ああああ！もしかしてほんとうなのお！！」

「ちよつとレイラ！」

あたしってどうしてこう・・・感情をすぐ読み取られちゃうの？

試験勉強　―ジェームズは期待の星?―

「だから、これはこうでこれはこう!わかる?」

「わかんねえ・・・なんでジェームズとローズはそんなに勉強得意なわけ?」

「あたしは親譲りよね。お母さん学年でトップを争ってたらしいし。」

「僕は、どうなんだろ?父さんは普通だったらしいし、母さんもまずまずの平均値だったらしいし。」

「ジェームズとか最高の才能じゃん!」

「「確かに・・・」」

「なんでアリアまで?アリアも成績いいじゃん」

「そりゃあ創設者の子孫だから?」

「「「嫌味・・・」」」

「あははっ」

相変わらずみんな仲いいし、なんかいつもどおりって感じ(笑)

「アリア、ちょっといいかね？」

「「ホラス先生！！」」

「みなさんおはよう^^相変わらず仲がいいのお。」

「ホラス先生なんですか？」

「ああ、そうじゃったそうじゃった。キミにというかキミたちに頼みがあるんじゃない。」

「頼み？」

「そうじゃ。今日から試験があるだろう。」

「それがどうしたんです？」

「この中で誰かに満点を取ってほしいのだが・・・」

「そういうことですか。」

「それが、創設者の子供の満点は受け付けられなくての・・・」

「ってかなんで満点を取るんですか？」

「ああ。今回キミたちが満点を取ると、3年になったときに監督生になれるように、マクゴナル先生が手配してるのでなあ。」

「そういうことですか・・・」

「それで、寮はちがうがとりあえず何人かに絞ってこのことを話しているのだが、

わしの寮は大丈夫との声は有るんだが、ハッフルパフが妙に心配で、

アリアはスーザンを仲がいいみたいだったのでな、忠告をしないとほしかったのだ。」

「わかりました。伝えときます！」

——試験終了——

「楽勝だったな。ジュリアはどうだった？」

「あたしも大丈夫。ルーズは？」

「案外得意なやつしか出てこなかったから助かった」

「「（笑）」」

「アリアは？」

「あたしは大丈夫だけど・・・スーザン」

「あたしも、得意なのしか出てこなかったから大丈夫だと思うわ。」

「

「「じゃあ遊びますか？」」

「「「「イエー———————イ！」」

「！！」

こうして、面倒くさい試験勉強&試験が終わってハイテンションになった

ジェームズたちでした。

（笑）

試験の結果　―アリアの才能は勉学にアリ!?―（前書き）

試験を受けた人数は適当です。

試験の結果　―アリアの才能は勉学にアリ!?―

「ジェーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

向こうからジュリアが大声で僕を呼びながら走ってきた。

「どうしたんだ?ジュリアそんなにあわてて。」

「だって試験結果見てびっくりよ!!」

「なにが。」

「だからけっかが!」

「ジェームズ行くか?」

「ルーズは?」

「俺どっちでもいい。」

「じゃあ行くだな。」

「早く行きましょう!ぜったいびっくりするわ!」

確かに行ってみて、いやこういう風に冷静に言ってる僕がすごい
んだけど（内心とっても興奮してる）

ほんとにびっくりする結果だった。

——— 試験結果 ———

満点・・・500点	試験受験生・・・1999人
1. アリア・グリフィンドール	（499点）
2. ジェームズ・ポッター	（498点）
3. ジュリア・ウィーズリー	（487点）
4. ルーズ・マルフォイ	（450点）
5. レイラ・コーラル	（448点）
6. アンディ・レイブンクロー	（439点）

（続く）

「やべえ！俺4番じゃん！」

「僕とか2番!？」

「驚くところが違ーーーーーう!!」

「へ？」

「ジュリアをぬいちゃったってこと？」

「ちがう。」

「じゃあ俺が4番にはいつてること？」

「あんたたちバカ？」

「「じゃあなんなんだよ!!」」

「アリアの点数を見なさい。」

「アリアの点数」?って・・」

「エーーーーー」
「っ!」

「ね?でしょ。」

「1問しか間違っていないじゃないか！」

「やばすぎるだろ！」

「でしょ？アリア、向こうで顎抜かしてるわ。」

確かに。向こうで口をあんどぐりあけて、
自分の点数に見入っている。

「アリア？」

「は、はい。ジェームズ。」

「大丈夫か？アリア。」

「う、うんって言いたいけど、だいじょぶくない。」

「ありやりや。」

「ありやりや。」

そんな感じで、みんな一日中（とくにアリア。）その試験結果に
見入られていたんだ。

あの点数まぢなのカーーーーーー！
！

3年 ―新入生にはルーズの妹!?!―

「それでは組み分けを始めます。」

どんどん名前を呼ばれていってる。僕の弟『アルバス・ポッター』もグリフィンドールになった。

でも次の名前に僕は頭の上に?をうかべた。

「マリーナ・マルフォイ」

(ルーズまさか・・・)

(妹だぜ?なんか変か?)

(妹いたの!?!ルーズ!)

(いたぜ。ジュリア。)

(ってことはまさかこの下にもいないでしょうね)

(いないいない(笑))

(笑ってる場合!?!?)

(わりー。アリア。でもなんで驚くんだ?)

（（だって似てないんだもん!!））

（そんなに？）

（（そんなに。））

「グリフィンドール!!」

「おっマリーナ。グリフィンドールおめでと。」

「ありがとう。お兄ちゃん。あと皆さん初めまして（ペコッ）」

「「「「「かわいいいいいいいいい」!!」」「」「」「」」

「ありがとうございます（照）」

こうして、驚きの組み分けが無事終わったのであった（笑）

あれ？

あるとき、アリアがあることに気付いてルーズに言った。

「ねえルーズ。」

「なに？」

「マリーナ、さっきからコールによそよそしんだけど・・・」

「ああマリーナと同じ年の？」

「そう。どうしたのかしら・・・」

コールとはコール・セルバー。マリーナと同じグリフィンドールで1年生のことだ。

「大丈夫だろ？怖いんじゃない？そんなぐらいいいよ。」

「あたしの怖いんじゃないと思うんだけど・・・」

「んあ？なんかいったか？」

「もう！いいわよ！スーザンにでも聞いてみたら！？」

あらら・・・いっちゃった。

「怒らせたなあルーズ。」

「な、なんだよ！じゃあマリナ、どうしたって言うんだよ！」

「ちよつとこつちこい。」

（なんだよ！）

（僕が思うに・・・マリナはコールがすきなんじゃないか？）

（はあ？）

（この前、ジュリアにマリナが相談してたんだよ、好きなやつがいるってな。）

（ほおお？で、それがコールだと？）

（そのとおり。お互いよそよそしいから、お互い好きなんじゃないかな。）

その後、ジュリアにあい、聞いてみると・・・

「ええそうよ？マリナに好きな人がいるって相談を受けたわ。」

「それ誰なんだよ。」

「だれにも言わない？」

「僕も知りたい！」

（言わないでよ？それは、）

（（それは？））

（コールよ。コール・セルバー）

（やっぱり。ゆっただろ？ルーズ。）

（そうなんだあ知ってて良かったかも）

（（なんで？））

（あいつこの前までマルクが好きだとか言ってたんだ）

（（うっそお！！））

（ほんと、だから変わってくれてよかった）

（そうね☆）（そうだね☆）

こうして、安心できたルーズは疲れが出たのか1日中授業の間、
寝ていたのであった（笑）

夏休みにはジェームズの家で大遊び。

「ねえねえ。もうすぐ夏休みじゃん。みんな予定ある？」

「予定い？ないな。俺はとことん暇だから。」

「あたしもお、夏休みってひまよねえ。」

「ってことはみんな暇？」

「」「暇あああああああ！！」「」

「じゃあさ、僕ん家来ない？」

「」「えっ？」「」

「父さんが暇だったら友達呼んで遊んでいいって！
よかったら家来て泊まっていかない？」

「」「行くううううううううううう！」「」

「即答・・・(汗)」

「いつからいいの？」

「一回荷物置いて1週間後の×日とかどう？」

「いいね！」

「じゃあ×日に僕の家で！」

「「「やったー！」「」」」

夏休み☆ ジェームズの家

「」「おっじゃまっしまーーす！……！」

「いらっしやい。どうぞ（ニコッ）」

グイッ

（ねえちよつと！）

（な、なんだよ、スーザン。）

（ジェームズのお母さん、あんなに美人なんて聞いてないわよ！）

（だよな。俺も美人だと思うけど……お父さんのほう見てから言った方がいいよ）

（ハリーポッターさんでしょ？ そんなの驚かないわ！ だって教科書に詳しく載ってたし。

写真は載ってなかったけどさあ……）

（そういう意味じゃないって！ 顔みろよ。か・お！）

（顔？）

「ジェームズ！ 俺の本を何処に隠した！」

「隠してないよ！ ちゃんと本棚に置いた！」

「それがないから聞いてるんだよ！」

タンタンタン……。

階段から降りてきたのはとてつもなくカッコいい（年がわかんな
いくらい若く見える）

ジェームズのお父さんハリーポッターさんだった。

「ジニー。見てないか？カーダー・ポクレインの『探れし、さす
れば道開かれん』って本。」

「探れし、さすれば道開かれん？さあ……見てないからわから
ないわ。」

「どこだろう……？ジュリアたち父さんたちと一緒に探すの手
伝ってくれない？」

「もちろん！おもしろそうね！」

「やろー！」

こうして本探しが始まったんだけど……

「キャー！」

「おわっ！」

「ヒイツ！」

本は、暴れるものから歌を聞かせて眠らせるものまで・・・
たくさんありすぎてわけがわからない。

「つたくどこにあるんだ？」

「ここですよ。ハリーポッター。」

「ありがとう。でもなぜココに『屋敷しもべ妖精』がいるんだ？」

「私はアナタにお使いするためにココにきたのです。」

名前は『パルナス』でございます。ポッター様。」

「じゃあ。今日からココのしもべ妖精？」

「そういうことになります。」

「は、はじめてみたわ！屋敷しもべ妖精！」

「俺は家にいるぜ。シェーパーって名前の。」

「スーザンとアリア、とバックとアンディは？」

「」「」「」

「じゃあこれでいないのうちだけえ？」

そのとき、外からふくろうの鳴き声が聞こえた。

ホーッ ホーッ

「おっヘドヴィグ。なんだ？なんだロンからだ。」

「お父さん。なんて？」

「僕のところにコーターって名前のしもべ妖精がきたってさ。」

「やったー！ー！」

こうして、これまたすごいことに

全員の家に屋敷しもべ妖精が居座る事になった。

いきなり訪問!?!ダドリー一家(前書き)

ダドリーの妻の名前作っちゃいました(笑)

まあ、本編でダドリーは結婚するか定かじゃないですけど・・・(汗)

いきなり訪問！？ダドリー一家

ピンポーン

ジェームズとルーズとバック、そしてアンディが魔法チェスで戦っている

ジュリアとアリアとスーザンが魔法のモノを浮かす魔法を練習しているとき、

いきなり家のチャイムがなった。

「誰だろ？」

「おーい！ジェームズ出てくれ！いま手が離せないんだ！」

「わかった！ごめん。ちょっとまって。」

1階に降りて玄関を開けると・・・

「・・・ジェームズか、ハリーはいるか？」

「父さんなら上で仕事してる。あがっていきますか？」

「そうさせてもらうよ。息子たちもいるから遊んでなさい。」

「ハロー、ジェームズ。お久しぶり☆」

「けっ！こんな家かよ。呆れるぜ。」

「ちょっとバグス！家よりココのほうが大きいわ。大体失礼ですよ？」

「いいんだレイラ。友達もいるから上で遊ぼう？バグス、お前は勝手にしてろ。」

それと勝手に僕のを触ると火傷するから気をつけとけよ。まあ信じてなかったら触って

見ればいい。怪我するのはお前だ。」

ジェームズとレイラは2階に上がっていった。

「お帰りジェームズ、ってその子だれ？」

「レイラっていうんだ、ダドリーの娘。バグス見たいな性格じゃないから

大丈夫だよ。」

「初めまして☆レイラ・ダーズリーです。」

「可愛いなあ・・・あたしもそんな風になってみたい！」

「全部、お母さんの遺伝子だと思うよ？お父さん、デブだしバカだし

何にも出来ないし・・・お母さんがかっこよくてしかたない！」

意外な事を思う、レイラでした・・・

お泊りするの!?(前書き)

レイラ視点&ジェームズ視点です。

お泊りするの!?

「おっお泊りするの!?!」

「そうだよ、バグス。楽しい夜になるといいなあ。」

「うれしいわ! スーザン、アリア、ジュリアまた一緒に遊べるね
☆」

「「やった! レイラ、上で遊びましょう!」」

「うん! じゃあ夕食のときにね!」

タンタンタンッ

レイラたちは2階に遊びに行ってしまった。

そのとき、

「あっ!?!」

いきなりルーズが大声をあげていった。

「ど、どうしたんだよ。そんな大声だして。。。」

「宿題! 今日やらないといけないやつあるぜ!」

「「「なんの?」」」

「天体だよ！天体図を書かないといけないやつ！」

「「やべーーーーー！！！」」

「早く行きなさい。宿題、出来なくなるわよ？夕食になったら呼ぶわ。」

「ありがとう母さん！行こう！」

ダダダダダダダダダッ！

「天体図かぁ・・・なつかしい・・・。」

「天体図、以上にうまかったわよね。ハリーは。」

「そうだったけ？」

こんな感じでとりあえず、宿題の存在にきずいた僕たちは大急ぎで宿題を済ませ、遊びまくったんだ。

あつもちろん、夕食はばっちり食べたよ☆

流星群は恋の嵐を呼んでくる!?(前書き)

寝る前のお話。

ジェームズが流星群の存在を思い出します(まあジェームズが気付いたって事ですな☆)

流星群は恋の嵐を呼んでくる!?

「きれい!!」

いま、僕たちは2階のベランダで流星群を見てるんだ。

「ステキ……」

「そういや、今日だったもんな。忘れてたぜ。」

グイッ

(レイラ!?)

(ちよつときて……)

僕はレイラに引っ張られてベランダをでて僕の部屋にいった。

「どうしたんだよ。」

「あのね?じつは……。私、アナタが好きなの。」

「えっ!?!」

「その……。気持ち知って欲しくて……」

ガチャッ

「何してるの？ ジェームズ、ジェームズのお母さんがレモンパイを焼いてくれたわ。

食べましょう！」

レモンパイ！

僕の大好きなレモンパイ！

「うん！ 今行くよ！ レイラ……。その……。」

「まあ、ジェームズが好きになるまでとことんやるわよ！
それまで、覚悟しといたほうがいいわ！」

「えっ……。」

しょうがなく、僕はしたに降りていった。

僕、大丈夫かな？

じゃあいつてきます！―ホグワーツへ戻る―

「ごめんな……。行くから。」

結局、ダーズリー家は夏休み中僕の家滞りし、その間この前の会話を聞いた

ジュリアがレイラにライバル心を燃やして家中ぴりぴりしてたんだ。

まあ、男子はなんとか無視して（てかしないとやばかったんだ宿題が……。）

夏休みは終り、今日からまたホグワーツの生活に戻る。

僕はとりあえず、父さんを引きずって少し離れて父さんに話した。

「父さん、僕どうしたらいい？」

「なにが……？」

「だ・か・ら！！父さんもわかるんだろ？レイラとジュリアが夏休み中ぴりぴりしてて

俺がいないとすごい事になってるの！」

「そういうことか……。あれは難しいと思うが。」

俺もいままであんな風になったことはないからなあ……。」

「えっ！？父さん結構人気あったんでしょ？（ロン談）」

「ロンから聞いたんだな……。でも、一人一人好きになって、

二人からそういう風に好きでピリピリされた事はないんだ（汗）

「そうなんだぁ……。どうしたらいいんだろう（涙）」

「とりあえず……。そうだな。母さんに手紙で相談したらどうだ？

時間もないし、ホグワーツについてから聞いてみる。」

「ううん、大丈夫。自分で何とかしてみるよ。ありがとう、父さん。」

「ああ。頑張れよ？」

「うん！」

こんな感じでとりあえず、ルーズから早く来ないと俺らがヤバイコールをうけて

9と4分の3番線を通ってホグワーツに向かったんだ。

レイラと分けられるとき、手紙頂戴ねって言われてすつごく困ったんだけど……

だってジュリアの顔がすごい怖い顔したから……。

僕、来年まで生きていられるよね？

ホグワーツ特急の中 100味ビーンズ

「おいルーズ、食べすぎだぜ？」

今は、ジュリア、ルーズ、スーザン、僕でホグワーツ特急の一室にいるんだけど……。ルーズがさっきからずっと買ったばかりのお菓子を

食べまくってるんだ。

「いい加減にしなさいよ。太るわよ？」

「だって久し振りに食べるし！久し振りでうまいんだもん！

じゃあ100味ビーンズ食べる人いる？」

ひゃっ100味ビーンズ！？

僕たちはコレに目がない。

だっておいしいチェリー味とかでたり

たまにゲロ味とか、でると面白いし！だからこれだけは誘惑に負けちゃうんだよなあ（汗）

「」「食べる！！」「」

こうして、100味ビーンズで誰が食べ終わる前に一番多く気持ち悪い味をひくか

ゲームしてたら……。

「やったわ！私はアップルパイ☆」

「あたしはレモン味だよ☆すつごくすっぱいけどおいしい！」

「おっ、僕はステーキ味かな？初めて食べるけどおいしい！」

「おえっ！ミミズ味だぁー」。

こんな感じが続いて・・・

ほとんどがルーズに当たっちゃったんだ（汗）

少し、食べ物をお粗末にするからこうなったのよって
さっきからスーザンがしつこく言ってる。

ホグズミードに行ったときこうならないといいけど・・・（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748x/>

最後の戦いが終わったとき

2011年11月29日16時45分発行